

沖縄のスポーツ報道にみられる「沖縄らしさ」 言説の諸相：

2000年以降の沖縄県地方紙を対象とした分析

中山 健二郎（沖縄大学人文学部）

The discourse on “Okinawan-ness” in Okinawan sports news coverage:

Analysis of local newspapers in Okinawa since 2000

Kenjiro Nakayama

Abstract

The discourse on “Okinawan-ness” is frequently used in Okinawan sports news coverage. Some studies have suggested that emphasizing national teams and athletes in news coverage reinforces nationalism and national identities. Thus, the discourse on “Okinawan-ness” in Okinawan sports news coverage may significantly influence the construction of Okinawan identities; however, its use and meaning have not been comprehensively examined. Therefore, this study aims to examine the usage and meaning of “Okinawan-ness” in Okinawan sports news coverage.

A content analysis was conducted on 233 articles from 2000 onward in the “Ryukyu Shimpo” and the “Okinawa Times,” the two major regional newspapers in Okinawa, using the phrase “Okinawan-ness.” The results revealed the following:

- (1) The discourse on “Okinawan-ness” is most frequently used in basketball, particularly in connotations such as “speed of a small player” and “unique individuality.”
- (2) The discourse on “Okinawan-ness” tends to be used for a wide range of competition levels and ages ranging from children to adults.
- (3) There are some differences in gender in which the discourse on “Okinawan-ness” is expressed in each competition. However, when viewed as a whole, there are some commonalities in the frequently used codes regardless of gender.
- (4) The meaning of the discourse on “Okinawan-ness” varies depending on the competition and context, and the meaning has not been clarified (and cannot be read) in many cases.

These findings suggest that the meaning of the discourse on “Okinawan-ness” in a particular competition symbolizes and differentiates the position and character of Okinawa in Japan. Moreover, the fluidity of the meaning could result in ensuring the self-evident nature of “Okinawan-ness.”

Key words: Okinawan identity, constructionism, sports and media, content analysis, floating signifier

I 緒言

スポーツ文化が国や地域、社会集団のナショナリズムやアイデンティティ形成に影響を与えることは、これまで国内外で数多く論じられてきた（中村, 1978; Branscombe and Wann, 1991; Hargreaves, 1992; Cronin, 1999; 高橋, 2005; ヘザーほか, 2018）。とりわけ近年では、ナショナリズムやアイデンティティを構築主義的な観点から捉え、スポーツをめぐる言説が集団的な意識を形作る側面を読み解く研究が盛んに行われている。例えば、Vincent et al. (2010) は、2006年サッカーW杯に関する英国の新聞報道を分析し、自国選手の活躍を帝国主義時代の軍事的成功に関連付けて報じるあり方が、揺らぐナショナル・アイデンティティの再統合に寄与する可能性を指摘した。国内では、有元 (2003) や笹生 (2020, 2021) がサッカー日本代表に着目し、「日本人」のナショナリズム構築に影響を与え得るメディア言説について検討を行っている。

上記の観点は、国家を単位とした分析のみならず、マイノリティや辺境地域などの周縁社会、および多文化主義におけるアイデンティティの問題を論じるうえでも重要である。これらの集団に属する人々は、「自分は何者であるのか」を絶えず問い直し自己言及的に意味づけることが日常の実践となりやすい（安達, 2020）。したがって、スポーツをめぐる言説がアイデンティティの構築に影響を与える側面も、特に顕在化しやすい可能性がある。例えば、Horton (2000) は、オーストラリアに住むアイルランド系移民にとって、スポーツ文化が自らのアイデンティティを確立させるための重要なシンボルであることを指摘している。スポーツ文化以外の領域においても、例えば宗教的な装いや飲酒などの生活様式が移民のアイデンティティ構築に関与している（安達, 2020）などの指摘もみられるが、これら他文化と比較し、スポーツ文化が重要な特異性を有していることも指摘されている。例えば、土佐 (2015) は、スポーツの特徴である、遊びに過ぎないにも関わらず模擬戦争のようなエキサイトを生み出すという両義性が、集団の共同意識における両義性（内面性と排他性）に附合することで、ナショナリズムの喚起に繋がると論じている。また、岡本 (2013) は、認識レベルのみならず身体感覚レベルで他地域との差異を実感し「自分たち」を確認するという点で、ローカルアイデンティティ構築の基盤となる身体・スポーツ文化の重要性を示唆している。

以上の議論を念頭に、本研究では沖縄県民のアイデンティティ構築とスポーツをめぐる言説に着目したい。沖縄では、今日においても県民の半数以上が「沖縄人であ



図1. 沖縄のスポーツ報道にみられる「沖縄らしさ」の言説（琉球新報, 2020/12/22）

り日本人でもある」という複合的アイデンティティを有しているとされる（熊本ほか, 2023）。しかしながら、2000年代以降は特に若者における「沖縄人」意識の低下とアイデンティティの不安定化が指摘されており（林, 2009）、メディアが報じる「沖縄イメージ」によって自らの「沖縄人らしさ」を再認識する者もみられる（多田, 2008）など、アイデンティティの問い直しという側面も看取される。こうした背景のもと、沖縄のスポーツ報道では、特定の動きや戦術、態度などを「沖縄らしさ」であるとする言説が散見される（図1）。これらの点を勘案すれば、スポーツをめぐる「沖縄らしさ」の言説が、揺らぐ沖縄県民のアイデンティティ構築に重要な影響を与えている可能性があると考え得る。

もともと沖縄では、固有の伝統的な身体文化が県民のアイデンティティ形成に寄与してきたとされている。例えば、岡本 (1997, 1998, 2013) は、沖縄県民にとってエイサー（民族舞踊）の活動が「踊りを通じて自己と他者の相違を確認する場」（岡本, 1997, p.562）であると論じ、エイサーが競技化する過程においても常に「我々」を確認・表象する手段として位置づいてきたことを指摘している。また、玉山 (1999) は、地域の伝統行事である綱引きの場で起こるバイオレンスの行為への参加が、若者の村落への帰属意識を高めていた事例を報告している。

他方、沖縄県民のアイデンティティは、明治期の「同化政策」や戦後の「祖国復帰運動」などにより、政治的な揺らぎにさらされてきた。加藤 (2001) や豊見山 (2007) はこれらの社会背景を踏まえ、国家的スポーツイベントにみられるナショナルなイデオロギーに対する沖

縄県民の態度を読み解いている。豊見山によれば、1964年の東京オリンピックに際した聖火リレーは、沖縄県民にとって『「祖国との一体感」をかつてないほど謳歌』（豊見山、2007、p.32）する機会であったという。一方で、加藤（2001）は、沖縄で1987年に開催された海邦国体において日本国旗が焼き捨てられたという事件に、「日本人」への統合に対する沖縄県民の抵抗を見出している。

このように、沖縄のスポーツ文化とアイデンティティに関する先行研究では、伝統的な身体文化が固有のアイデンティティ形成に寄与してきた側面や、近代化の過程で不安定化せざるを得なかった「沖縄人」／「日本人」意識の相克がスポーツ文化に象徴化された側面などが検討されてきた。ただし、先述した沖縄の今日的状況に表れているのは、先行研究で論じられた「伝統」と「混乱」といえるような歴史的展開を経た後、現代の県民が「自分は何者であるのか」を問い直し、自己言及的に定義しようとする姿である。こうしたアイデンティティの再帰的な組織化（ギデンズ、2005、p.5）に対するスポーツ文化の影響を読み解くためには、冒頭で論じた構築主義的な観点に示唆を得て、現代の沖縄におけるスポーツをめぐる言説を分析することが有効になると思われる。ここでいう「アイデンティティの再帰的な組織化」とは、アイデンティティを保証する所与の条件（例えば、歴史や伝統など）の自明性が揺らいでいる状態において、人々が「自分は何者であるのか」という観念を自ら探求し、意味づけ、構築していくプロセスを意味している。

深谷（2010）によれば、1990年代に活躍した沖縄の著名な高校野球指導者に対し、沖縄のメディアは「沖縄的なもの」を押し付けるような報道を展開していたという。このように、県内メディアが沖縄のスポーツ文化に「沖縄らしさ」の意味を付与しようとすることは、アイデンティティの自己言及的な構築を問ううえで注目すべき側面である。しかしながら、沖縄県内のスポーツ報道における「沖縄らしさ」という言説の諸相を包括的に分析した研究は管見の限りみられない。そこで、本研究では、沖縄県内のスポーツ報道において、「沖縄らしさ」という文言が何に対して、どのような意味で用いられているのかについて検討することを目的とする。

Ⅱ 調査方法

1. 対象

調査対象は、沖縄県の二大地方紙である「琉球新報」「沖縄タイムス」の記事とした。上記の二紙は、合計すると沖縄県の新聞購読シェアの8割超を占める（松本、2020）ことから、沖縄県民のアイデンティティ構築に関わる「物語装置」（加藤、2015、p.12）として重要な位置

づけにあるものと推察される。現代の沖縄におけるアイデンティティの自己言及的な構築という観点からスポーツ報道に着目するため、2000年1月1日から2023年12月31日までの24年間分の記事を分析の対象とした。

特に2000年以降、首里城2000円札の発行（2000年）や沖縄を舞台としたNHK連続テレビ小説の放映（2001年）などを契機として、明るい「沖縄イメージ」が全国的に喧伝される事例が増加した。こうした事例の蓄積により構築されたイメージが沖縄でも受容されたことで、沖縄県民はこれらの「メディア上の沖縄イメージに、自分の過去の経験、記憶や、日常の生活実感を重ね合わせることで、皮膚感覚から『沖縄県民』『ウチナーンチュ』のアイデンティティを引き出して」（多田、2004、p.224）きた側面があるという。すなわち、2000年以降にみられた「沖縄イメージ」の構築は、沖縄県民にとって「自分たちのアイデンティティの一部を織りなす現実的な効力」（多田、2004、p.11）として、まさにアイデンティティの自己言及的な構築を促進するものであったと推察される。したがって、2000年以降の記事を対象とすることは、特に沖縄の人々が「自分は何者であるのか」を盛んに問うことになった時代に生み出された言説を読み解くという点で、重要な意義を有している。

2. 分析手法

「琉球新報」「沖縄タイムス」のデジタルアーカイブを用いて、上記の期間に「沖縄らしさ」あるいは「沖縄らしい」という文言（以下、「沖縄らしさ言説」と略す）をタイトルあるいは本文中に含んだ記事を検索した^{注1)}ところ、「琉球新報」1070本、「沖縄タイムス」1244本の記事が該当した。これらすべての記事を通読した結果、スポーツに関して「沖縄らしさ言説」が用いられていた記事は計233本（「琉球新報」134本、「沖縄タイムス」99本）であった。そこで、これら233本の記事について内容分析を行った。内容分析は、テキストの内容を数量化してコミュニケーションの意味を推論する手法（Riffe et al., 2019）であり、メディアによる「沖縄らしさ」の意味づけを読み解く本研究の目的に合致している。

具体的には、研究目的に照らし、各記事において「沖縄らしさ言説」が「何に対して」（分析①）、「どのような意味で」（分析②）用いられているのかに着目した。分析①では、「沖縄らしさ言説」が用いられた記事が取り上げている対象に関して、「競技」「性別」「年代・カテゴリー」という3つの観点から、表1に示した区分に従い記事を分類した。

また、分析②では、「沖縄らしさ言説」がどのような意味で用いられているのかについてコーディングを行った。

表1. 分析①分類区分

観点	分類内容	分類基準
競技	記事の対象とされた競技	○具体的な競技に関する記事は「競技名」で分類 ○大会やイベント全体の記事など、特定の競技に分類できない場合「その他」に分類
性別	記事の対象とされた団体や選手の性別	○男性／女性どちらかに限定された競技者・団体に関する記事は「男性」「女性」に分類 ○男女混合の団体や性別を限定しないイベント等に関する記事は「限定なし」に分類
年代・カテゴリ	記事の対象とされた年代や競技カテゴリ	○学生の競技者・団体に関する記事は「小学生」「中学生」「高校生」「大学・短大・専門学校生」に分類 ○実業団やプロ、一般成人の競技者・団体に関する記事は「社会人・プロ」に分類 ○県選手団など年代を跨ぐカテゴリや全年齢対象イベント等の記事は「その他」に分類

コーディングは、分析者がテキストの意味を解釈し数量化していく作業のため、その解釈の妥当性について検証を行うことが望ましい。そこで、新聞や史資料分析の経験がある博士課程の大学院生1名に検証のための第二コーダーを委託した。第二コーダーは、スポーツ社会学に関する知見があり、かつ、沖縄での在住経験がなく沖縄に対して特定の思想・信条や特別な意識を持たないことを基準に選定した。まず、筆者が233本すべての記事进行分析し、コードの生成と定義、分類を行ったうえで、第二コーダーにコード一覧とその定義を共有し、ランダムに抽出した25本の記事の分類を行ってもらった^{注2)}。筆者と第二コーダーの分類結果について、一致度の評価指標であるk係数を算出したところ、 $k=0.866$ となった。 $k \geq 0.6$ で十分高い一致度、 $k \geq 0.8$ でかなり高い一致度と判断できる(Landis and Coch, 1977)ことから、筆者による分析が学術的な信頼に足る水準の妥当性を有していることが確認された^{注3)}。

Ⅲ 調査結果

1. 「沖縄らしさ言説」が用いられた対象

まず、分析①の結果をもとに、「沖縄らしさ言説」がどのような対象に用いられているのかについて論じていく。

1.1 「競技」「性別」「年代・カテゴリ」

「沖縄らしさ言説」が用いられた記事が取り上げている「競技」(表2)については、「バスケットボール」が

表2. 「沖縄らしさ言説」が用いられた「競技」

n=233

競技	記事数(本)	割合(%)
バスケットボール	51	21.9
ハンドボール	21	9.0
野球	19	8.2
舞踊・エイサー	18	7.7
空手	18	7.7
サッカー	12	5.2
ゴルフ	11	4.7
マラソン	10	4.3
自転車	6	2.6
新体操	6	2.6
ダンス	5	2.1
バレーボール	5	2.1
なぎなた	4	1.7
水球	2	0.9
和太鼓	2	0.9
合計	190	81.5%

2本以上の記事がみられた競技のみ抜粋

表3. 「沖縄らしさ言説」が用いられた「性別」

n=233

性別	記事数(本)	割合(%)
男性	108	46.4
女性	45	19.3
限定なし	80	34.3

表4. 「沖縄らしさ言説」が用いられた「年代・カテゴリ」

n=233

年代カテゴリ	記事数(本)	割合(%)
小学生	8	3.4
中学生	17	7.3
高校生	72	30.9
大学・短大・専門学校生	7	3.0
社会人・プロ	70	30.0
限定なし	60	25.3

最も多く、次いで「ハンドボール」「野球」「舞踊・エイサー」「空手」などの競技が上位に位置していた。

「沖縄らしさ言説」が用いられた記事が取り上げている「性別」(表3)については、「男性」が「女性」に比べ多くみられた。また、「年代・カテゴリ」(表4)については、「高校生」「社会人・プロ」が上位を占めていた。

1.2 「競技」ごとの「性別」「年代・カテゴリー」

ここで、競技によって「沖縄らしさ」の意味づけがなされる対象に特徴がみられるかについて検討するため、「競技」の分類で10本以上の記事がみられた上位8競技について、それぞれ「性別」「年代・カテゴリー」に関する分析を行った。

「競技」ごとの「性別」（表5）をみると、特に「バスケットボール」「ハンドボール」「野球」「サッカー」「マラソン」は半数以上が「男性」の競技者や団体に関する記事であった。一方で、「舞踊・エイサー」は性別を限定しない記事、「空手」は女性の競技者や団体に関する記事が多くみられた。

「競技」ごとの「年代・カテゴリー」（表6）については、特に「ゴルフ」「サッカー」では「社会人・プロ」に関する記事、「舞踊・エイサー」「空手」「マラソン」では年代やカテゴリーが限定されていない対象の記事が多くみられた。

2. 「沖縄らしさ言説」の意味

次に、分析②の結果をもとに、「沖縄らしさ言説」がどのような意味で用いられているのかについて論じていく。

2.1 コーディング結果

分析②において生成されたコードとその付与数、それぞれのコードの意味内容を表7に示す。なお、1つの

「沖縄らしさ言説」の文脈から複数の意味を読み取ることができるときには複数のコードを付与していることから、コード数の合計は分析した記事数を超えている。合計で40のコードが生成され、それらはコードの意味内容から5つのカテゴリーにまとめられた。

コードの一覧をみると、「沖縄らしさ言説」が多様な意味で用いられていることが分かる。特に「プレー・能力・戦術」面に関して「沖縄らしさ言説」が多く用いられており、そのなかでも「速さ・走力」が「沖縄らしさ」であるとされている文脈が数多くみられた。その他、「プレー・能力・戦術」面における「個性・個人技」、環境面における「景観」、「文化」的側面における「音楽」「デザイン」などを「沖縄らしさ」であるとする文脈も比較的多くみられた^{注4)}。

しかしながら、全体で最も多いコードは「意味不定」、すなわち、「沖縄らしさ言説」が用いられているものの、その「沖縄らしさ」が示す具体的な意味を記事の文脈から読み取ることができないものであった。例えば表8に示したように、「沖縄らしいプレー」「沖縄らしい演技」などの記述において「何が沖縄らしいプレーや演技なのか」が前後の文脈を含めても不明確なものなどがこのコードに該当している。

コーディングの結果を踏まえ、以下では「沖縄らしさ言説」の意味について、特に競技や対象ごとにみられた傾向性をより詳細に検討してみたい。

表5. 「競技」ごとの「性別」

競技	男性	女性	限定なし
バスケットボール (n=51)	43 (84.3%)	4 (7.8%)	4 (7.8%)
ハンドボール (n=21)	14 (66.7%)	7 (33.3%)	0 (0%)
野球 (n=19)	18 (94.7%)	0 (0%)	1 (5.3%)
舞踊・エイサー (n=18)	1 (5.6%)	1 (5.6%)	16 (88.9%)
空手 (n=18)	5 (27.8%)	10 (55.6%)	3 (16.7%)
サッカー (n=12)	11 (91.7%)	0 (0%)	1 (8.3%)
ゴルフ (n=11)	3 (27.3%)	5 (45.5%)	3 (27.3%)
マラソン (n=10)	7 (70.0%)	2 (20.0%)	1 (10.0%)

10本以上の記事がみられた競技のみ抜粋

表6. 「競技」ごとの「年代・カテゴリー」

競技	小学生	中学生	高校生	大学・短大・専門学校生	社会人・プロ	その他
バスケットボール (n=51)	1 (2.0%)	5 (9.8%)	18 (35.3%)	2 (3.9%)	22 (43.1%)	3 (5.9%)
ハンドボール (n=21)	1 (4.8%)	6 (28.6%)	6 (28.6%)	0 (0%)	7 (33.3%)	1 (4.8%)
野球 (n=19)	0 (0%)	0 (0%)	8 (42.1%)	2 (10.5%)	9 (47.4%)	0 (0%)
舞踊・エイサー (n=18)	1 (5.6%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (11.1%)	15 (83.3%)
空手 (n=18)	1 (5.6%)	0 (0%)	2 (11.1%)	2 (11.1%)	3 (16.7%)	10 (55.6%)
サッカー (n=12)	1 (8.3%)	1 (8.3%)	2 (16.7%)	0 (0%)	7 (58.3%)	1 (8.3%)
ゴルフ (n=11)	1 (9.1%)	1 (9.1%)	0 (0%)	0 (0%)	7 (63.6%)	2 (18.2%)
マラソン (n=10)	0 (0%)	0 (0%)	1 (10.0%)	0 (0%)	3 (30.0%)	6 (60.0%)

10本以上の記事がみられた競技のみ抜粋

表7. コーディング結果

カテゴリー	コード	数	「沖縄らしさ言説」の意味内容
プレー・能力・戦術	速さ・走力	42	プレー・能力における速さや走力、それらを生かした戦術など
	個性・個人技	12	個性的なプレーや動き、個人技や個性の豊かさ、それらを生かした戦術など
	リズム感	9	独特なリズムやテンポ、緩急のある動きやプレーなど
	強気・攻撃的	8	強気なプレーや姿勢、攻める意識、攻撃的な戦術など
	トリッキー	4	トリッキーな動きやプレー、奇襲・奇策など
	粘り	3	粘りのある動きやプレー、戦い方、姿勢など
	力強さ	2	プレー・能力パワーや力強さ、それらが表れた型や姿勢など
	柔らかさ	2	柔らかい、しなりのある身体やプレー、それらが表れた型や姿勢など
	バネ・身体能力	2	バネがある身体やプレー、身体能力の高さ、それらを生かした戦術など
	連携	2	プレーや戦術における連携の巧みさ、連動性など
	重厚・荘厳	2	プレーや動きの重厚・荘厳さ、どっしりとした姿勢や戦い方など
	感性	1	プレーや動きにおける感性の豊かさ、それを生かした戦術など
	体力・運動量	1	プレー・能力における体力や運動量、それらを生かした戦術など
環境	景観	11	自然豊かな景色、集落や町並み、米軍基地の景観など
	風	7	風の強さや海風、暖かな風など
	海	6	青い海、美しい海、海を臨む地形やビーチなど
	青空・晴天	5	天気の良いさ、青空や晴天の様子など
	温暖な気候	5	温暖な気候や環境、暑さ、など
態度・表象	温かさ・思いやり	6	温かい、思いやりのある印象や性格、態度、雰囲気など
	平和	4	平和であることやその精神、コンセプトなど
	熱狂・情熱	3	情熱的な様子や態度、熱狂的、ノリの良い雰囲気など
	伸び伸び	2	伸び伸び、はつらつとしたプレーや姿勢、態度など
	明るさ	2	明るい印象や性格、態度、雰囲気、笑顔など
	多様さ	2	国籍や世代を跨いだ集まりや繋がり、多様な人々が参加している様子など
	日焼け	2	日焼けした身体や肌など
	ゆったり	1	ゆったりとした姿勢や態度、マイペース、のんびりした様子など
	がむしゃら	1	がむしゃら、一所懸命、泥臭さなどの態度や姿勢など
	爽やか	1	爽やかな印象や性格、態度、雰囲気など
	素朴	1	素朴、純真な印象や性格、態度、雰囲気など
	繋がり・絆	1	繋がり、結束、絆の強さがみられる関係性や雰囲気、態度など
文化	音楽	13	沖縄の楽曲、三線などの楽器、それらを使用した応援、リズムなど
	デザイン	13	沖縄の特徴的な柄やモチーフ、鮮やかな色使いを用いたデザインなど
	指笛	4	指笛の応援やリズムなど
	料理・食材	3	沖縄の食材を使った料理や食文化など
	花	3	沖縄の花やその美しさなど
	言葉・氏名	3	沖縄の言葉、方言、うちなーぐち、沖縄独特の氏名など
	カチャーシー	2	カチャーシーの応援やリズムなど
	お土産	1	ご当地ものや県産品のお土産など
その他	意味不定	64	「沖縄らしさ」が何を意味しているのかが不定・不明確な文脈
	競技自体	12	記事に取り上げられている競技そのものが「沖縄らしさ」であるとする文脈

表8. 「意味不定」の文脈例（記事の一部抜粋）

「選手17人をまとめた●●主将（17）は『去年は準優勝だったので、泣きそうなくらいうれしい。全国大会でも沖縄らしいプレーをしたい』と意気込んだ」（沖縄タイムス、2013/04/22）
「新体操は男子個人戦に●●（南風原）が出場。ミスを恐れず、堂々とプレーしてほしい。女子は団体に普天間、個人に●●（普天間）が出る。沖縄らしい演技を期待したい」（琉球新報、2015/07/26）

●●は個人名のため伏せ字

表9. 「バスケットボール」「ハンドボール」のコード数

コード	バスケットボール	ハンドボール
速さ・走力	25	13
個性・個人技	4	5
リズム感	4	0
トリッキー	2	0
強気・攻撃的	2	1
バネ・身体能力	1	1
熱狂・情熱	1	0
伸び伸び	1	0
指笛	1	0
料理・食材	1	0
デザイン	1	0
体力・運動量	0	1
がむしゃら	0	1
日焼け	0	1
意味不定	14	5

2.2 「バスケットボール」「ハンドボール」における「沖縄らしさ」の意味

多くの記事がみられた「バスケットボール」「ハンドボール」における「沖縄らしさ言説」については、「プレー・能力・戦術」面の上位を占める「速さ・走力」「個性・個人技」のコードが特に集中していた（表9）。これらのコードが付与された具体的な文脈（表10、11）をみると、「バスケットボール」「ハンドボール」では共通して「小柄であるが故にスピードや走力、それらを活かし

た戦術で戦うこと」や「特異性・個性や個人技を活かして戦うこと」などが「沖縄らしさ」であるとされている様相が看取される。一方で、表9からも分かるように、「速さ・走力」「個性・個人技」以外にも、数は少ないな

表10. 「バスケットボール」「ハンドボール」における「速さ・走力」の文脈例（記事の一部抜粋）

「昨年本国体優勝の福岡を決勝で破り、九州ブロック国体優勝を果たしたバスケットボール成年男子。身長は全国に比べて低いチームだが、速さを生かした『沖縄らしいバスケット』で全国の強豪に挑む」（琉球新報、2007/07/05） 「●●県ハンドボール協会会長 準決勝まではゆとりがあったが、決勝は相当なプレッシャーがあったと思う。終盤見せた守備の粘りがこのチームの信条。みんな小さい選手だが、沖縄らしい『走り勝つハンドボール』を体現してくれた」（沖縄タイムス、2014/10/21） 「チーム発足当時から琉球コラソンを応援する●●さん（会社員、浦添市）は『体格で本土の実業団チームに負けていても、スピードや個性的なプレーで立ち向かう。沖縄らしいハンドボールが見えて楽しい』と魅力を語る」（琉球新報、2014/11/18） 「県代表で2年連続2度目の出場となる男子豊見城は、1回戦で5年ぶり2度目の出場の福島東稜と対戦。2年連続8度目の女子西原は初出場の千葉経済大付と1回戦でぶつかる。豊見城、西原とも身長では全国に及ばないが、堅守速攻を生み出す沖縄らしい『走るバスケット』で上位進出を狙う」（琉球新報、2019/12/21）

●●は個人名のため伏せ字

表11. 「バスケットボール」「ハンドボール」における「個性・個人技」の文脈例（記事の一部抜粋）

「●●は『サッカーで言ったら沖縄のハンドは個のプレーを見せられるブラジル。沖縄で小学校から培ってきた』と強みを強調する。（中略）『楽しく沖縄らしいハンドができた』と笑みが弾けた」（沖縄タイムス、2007/10/5） 「本土の組織的なプレーとは異なり、沖縄は小気味よいリズムの個人技に特徴があるという。●●は沖縄らしいバスケの背景に、米軍の存在やNBAなどのプレーを見ることができた『6チャンネル』の影響を挙げる」（琉球新報、2023/07/21）

●●は個人名のため伏せ字

が様々な意味で「沖縄らしさ言説」が用いられており、また、「意味不定」も一定数みられている。

2.3 「野球」「サッカー」における「沖縄らしさ」の意味

「野球」「サッカー」の記事に着目すると、「プレー・能力・戦術」面よりもむしろ、「音楽」や「デザイン」といった「文化」的側面に関する「沖縄らしさ言説」が比較的多い傾向が看取された（表12）。具体的な文脈をみると、例えば「野球」における「音楽」（表13）については「プロ野球や高校野球の応援で用いられる沖縄の楽器や曲」が「沖縄らしさ」とされ、「サッカー」における「デザイン」（表14）では「ユニフォームに取り入れられたミンサー柄やシーサーなどのデザイン」が「沖縄ら

表12. 「野球」「サッカー」のコード数

コード	野球	サッカー
音楽	3	0
青空・晴天	2	0
温暖な気候	2	1
速さ・走力	1	0
伸び伸び	1	0
ゆったり	1	0
多様さ	1	0
景観	1	0
指笛	1	0
カチャーシー	1	1
デザイン	1	3
トリッキー	0	1
リズム感	0	1
個性・個人技	0	1
感性	0	1
繋がり・絆	0	1
意味不定	5	4

表13. 「野球」における「音楽」の文脈例（記事の一部抜粋）

「市民有志で立ち上げた球団公認の『名護ファイターズクラブ後援会』の●●副会長は『三線演奏や沖縄らしい応援で、いつものキャンプより盛り上げたい』と待ち切れなさそうだった」（沖縄タイムス、2018/12/9） 「スタンドでは試合中、好機が訪れば『ハイサイおじさん』など沖縄らしい曲に乗せて、どうすれば選手らを気持ちの面で後押しできるのかを常に考えながら応援に励む」（琉球新報、2023/8/18）
--

●●は個人名のため伏せ字

表14. 「サッカー」における「デザイン」の文脈例（記事の一部抜粋）

「●●社長からユニホームの新デザインの発表もあった。伝統柄『ミンサー』を随所に取り入れ、『沖縄らしさ』をテーマにしているという」（琉球新報、2019/1/10） 「クラブ公式X（旧ツイッター）の発表は200万回以上閲覧され、コメント欄には『沖縄らしさが失われた』『シーサーをエンブレムに入れられる唯一のJクラブ、もったいない』などの書き込みが相次いだ」（沖縄タイムス、2023/11/2）
--

●●は個人名のため伏せ字

しさ」とであるとされていることが窺える。ただし、「野球」「サッカー」のどちらも最も頻出していたコードは「意味不定」であった。

2.4 「ゴルフ」「マラソン」における「沖縄らしさ」の意味

「ゴルフ」「マラソン」の記事では、「環境」面についての「沖縄らしさ言説」が数多くみられた（表15）。特に

「ゴルフ」では「風」が最も多く、「強い風が吹く様子やその状況でのプレー」が「沖縄らしさ」であるとされているものとみられる(表16)。また、「マラソン」では「景観」が最も多く、「米軍基地や景色の綺麗さなど沖縄ならではのコース」が「沖縄らしさ」であるとされている様相が看取される(表17)。

2.5 「舞踊・エイサー」「空手」における「沖縄らしさ」の意味

沖縄の伝統的な身体文化である「舞踊・エイサー」や「空手」の記事では、「競技自体」を「沖縄らしさ」であるとする言説がそれぞれみられている(表18)。また、「舞踊・エイサー」では「音楽」が最も多く、特に県外の

人々や観光客からの視線を念頭に「沖縄の曲やその曲に合わせた踊り」が「沖縄らしさ」であるとされているものとみられる(表19)。一方で、「空手」では「力強さ」「柔らかさ」「重厚さ」「リズム感」などの身体・動きに関連する文脈が散見され、それらが「沖縄らしい型(演舞)」として提示されている様相が窺える(表20)。ただし、「野球」「サッカー」にみられた傾向と同様、「舞踊・エイサー」「空手」に共通して最も多くみられたコードは「意味不定」であった。

表15. 「ゴルフ」「マラソン」のコード数

コード	ゴルフ	マラソン
風	5	1
青空・晴天	2	0
景観	1	6
温暖な気候	1	1
料理・食材	1	0
競技自体	1	0
海	0	3
平和	0	1
デザイン	0	1
意味不定	0	1

表16. 「ゴルフ」における「風」の文脈例(記事の一部抜粋)

「沖縄らしい強い風の中でも安定したプレーを披露した。チャンスにつけた10、13番と力強いタッチでカップに沈めた」
(沖縄タイムス, 2017/11/4)

「朝から沖縄らしい強風が吹き付ける厳しい天候だった。『我慢比べだな』と慎重なプレーが続く」
(琉球新報, 2022/3/26)

表17. 「マラソン」における「景観」の文脈例(記事の一部抜粋)

「基地内コースが沖縄らしい印象
●●さん(三八)＝東京都 おきなわマラソンは初参加。目標タイムは3時間半以内だったが、坂道が多くてきつかった。太鼓をたたいての応援や、参加者に外国の方が多いこと、基地内を走ったことが沖縄ならではの、印象的だった」
(琉球新報, 2006/2/27)

「起伏の激しいコースだったが沿道の声援を受けて、リズムよく走ることができた。膝を痛めていたが沖縄らしいきれいな景色を見ながらレースを展開できた」
(沖縄タイムス, 2015/12/7)

●●は個人名のため伏せ字

表18. 「舞踊・エイサー」「空手」のコード数

コード	舞踊・エイサー	空手
音楽	3	0
競技自体	2	5
平和	2	0
花	1	0
言葉・使命	1	0
デザイン	1	1
力強さ	0	2
柔らかさ	0	2
重厚さ	0	2
リズム感	0	2
粘り	0	1
温かさ・思いやり	0	1
素朴	0	1
意味不定	9	5

表19. 「舞踊・エイサー」における「音楽」の文脈例(記事の一部抜粋)

「エイサー初体験という県系2世の●●さん(17)＝米国イリノイ州＝は『音楽や踊りすべてが沖縄らしい。難しかったけど、仲間と一緒に練習できて楽しかった』と笑顔を見せた」
(沖縄タイムス, 2011/8/8)

「せりふはやまとぐちで音楽も特に沖縄らしい曲ではない。県外の観客も分かりやすく沖縄の歴史に触れられる半面、より沖縄らしさを求める観客にとっては物足りないかもしれない」
(琉球新報, 2014/9/3)

●●は個人名のため伏せ字

表20. 「空手」における身体表現の文脈例(記事の一部抜粋)

「『トーナメント戦は総合力がなければ勝ち抜けない。●●はパワフルでかつ表現力、緩急のある沖縄らしい演武を緊張することなく見せてくれた』と語り、今後の活躍に期待を寄せた」
(沖縄タイムス, 2004/5/13)

「11日の3位決定戦は長年鍛錬を積んだ剛柔流のセイサンで締める。出だしの弱さは課題として残り、まだ完璧ではない。『沖縄らしい重さとムチミ(しなり)を表現する。全力を出しきる』と地元の底力を見せつける」
(琉球新報, 2019/8/11)

●●は個人名のため伏せ字

2.6 「性別」「年代・カテゴリー」別にみる「沖縄らしさ」の意味

記事が扱う対象別に「沖縄らしさ言説」の意味を検討するため、分析①で分類した「性別」「年代・カテゴリー」ごとに頻出するコード上位3位までを抽出したところ、表21、22に示した結果が得られた。なお、「年代・カテゴリー」については記事数を考慮し、「小学生」「中学生」「高校生」「大学・短大・専門学校生」を合算して「学生」としたうえで、「社会人・プロ」「限定なし」の分類と比較している。

「性別」については、順位に差異はあるものの、「男性」「女性」とともに「速さ・走力」「意味不定」のコードが上位に位置していた。また、「限定なし」の記事においては「景観」「音楽」「デザイン」など、環境面や文化的側面で「沖縄らしさ言説」が比較的多く用いられている傾向がみられた。

「年代・カテゴリー」については、すべての分類で「意味不定」が最上位に位置していた。また、「学生」と「社会人・プロ」では共通して「速さ・走力」が多くみられた一方で、「限定なし」の記事では「競技自体」や「景観」「音楽」など、プレーや戦術面以外の要素が比較的上位にみられた。

表21. 「性別」別の頻出コード

	男性	女性	限定なし
1	「速さ・走力」(35)	「意味不定」(12)	「意味不定」(24)
2	「意味不定」(28)	「速さ・走力」(6)	「景観」(8)
3	「個性・個人技」(9)	「競技自体」(5)	「音楽」(7) 「デザイン」(7)

括弧内はコード付与数

表22. 「年代・カテゴリー」別の頻出コード

	学生	社会人・プロ	限定なし
1	「意味不定」(28)	「意味不定」(18)	「意味不定」(18)
2	「速さ・走力」(27)	「速さ・走力」(12)	「競技自体」(7)
3	「音楽」(7)	「個性・個人技」(6) 「デザイン」(6)	「景観」(5) 「音楽」(5)

括弧内はコード付与数

IV 考 察

以上の調査結果を踏まえ、現代の沖縄のスポーツ報道における「沖縄らしさ」言説の諸相について、本研究の問題関心である沖縄県民のアイデンティティ構築という観点を念頭におきつつ考察を行う。

1. 競技における「沖縄らしさ」とアイデンティティ構築

「沖縄らしさ言説」が用いられた記事が扱う競技については「バスケットボール」「ハンドボール」などが特に多くみられている。これらの競技が、沖縄の伝統文化とされる「舞踊・エイサー」「空手」などよりも上位に位置していたことは示唆的である。「舞踊・エイサー」「空手」で用いられている「沖縄らしさ言説」の意味をみると、その「競技自体」が「沖縄らしさ」であるとする文脈もみられることから、伝統的な競技はわざわざ「らしさ」に言及しなくとも、既に沖縄県民に「沖縄の文化である」という認識が浸透している可能性も推察される。また、バスケットボールはBリーグに所属する「琉球ゴールデンキングス」、ハンドボールはリーグHに所属する「琉球コラソン」というトップチームが県内に存在することで、そもそも県内紙においてこの二競技を対象とした報道量自体が多い可能性も指摘できる。ただし、これらの点を踏まえても、結果として「バスケットボールやハンドボールにおける特定の能力やプレー、戦術などを『沖縄らしさ』とする記事が沖縄県民に多く提示されている」という事実は、沖縄県民のアイデンティティ構築におけるスポーツ文化の影響を問ううえで重要であろう。

特に、最も多くの記事がみられたバスケットボールは、県の競技者数が人口比率で全国最多（奈良部，2024）であり、「琉球ゴールデンキングス」の活躍や2023年のW杯開催を経て、沖縄で高い人気を誇る競技として定着してきている。明治期の日本統合という社会的文脈のなかで沖縄に持ち込まれ（張本・麻生，2024）、戦後は米国文化の影響も受けつつ展開されてきた（岡本，2012）沖縄のバスケットボールに関して数多く「沖縄らしさ」が語られていることは、沖縄アイデンティティの自己言及的な構築に関わるスポーツ報道の一側面として注目し値する。そこでみられた「小柄であるが故にスピードを活かす戦い方」や「特異的な個性」などの意味づけは、日本における沖縄という地域の立ち位置やキャラクターを象徴し差異化を図る言説として、揺らぐ沖縄県民のアイデンティティ構築に重要な影響を与えている可能性もあるといえよう。

ただし、「スピード」や「個性」を「沖縄らしさ」であるとする文脈は、その大半がバスケットボールとハンドボールの記事でみられている。すなわち、これらの意味づけは、全体の分析結果として最も多くみられているものの、その内実は沖縄のスポーツ文化全体を貫く「沖縄らしさ」であるというよりも、特定の競技に特徴的なものである可能性があるといえる。

2. 「沖縄らしさ」の包括性

「沖縄らしさ言説」が用いられた年代やカテゴリーについては「高校生」「社会人・プロ」が多くみられている。記事が取り上げている対象として、高校野球や高校総体、プロ団体の試合結果などが多くみられたことから、そもそも県内のスポーツ報道全体でこの二つの年代やカテゴリーに関する報道量が多い可能性も指摘できる。「沖縄らしさ言説」の意味づけに着目すると、年代やカテゴリーによってそれほど差異はみられない。これらのことから、スポーツをめぐる「沖縄らしさ」は、特定の年代やカテゴリーに限定して提示されるものではなく、子どもから大人まで、競技力のレベルにあまり左右されることなく語られている傾向にあることが推察できる。

他方、「沖縄らしさ言説」が用いられた性別をみると、男性競技者や団体を扱った記事がより多くみられている。特に「沖縄らしさ言説」が数多くみられたバスケットボール、ハンドボールで男性の競技者・団体を対象とした記事が多いことは、全体の件数の性別比率に大きな影響を与えている。その意味で、これらの競技でみられた「スピード」や「個性」という意味づけは、あくまでバスケットボールやハンドボールの男性を中心としたものとして捉える必要がある。また、五輪金メダリストの喜友名諒選手をはじめ男性競技者の活躍も目立つ空手において、女性競技者を対象とした記事により多くの「沖縄らしさ言説」がみられたことも興味深い。空手では特に、女性の身体や動きに対して「沖縄らしさ」が語られる傾向にあるといえる。このように、競技ごとにみれば「沖縄らしさ言説」が表れる性別にやや差異がみられている。

しかしながら、性別の頻出コードをみると、男性も女性も同様のコードが上位に位置しており、件数に差異はあるものの、どのような意味で「沖縄らしさ言説」が用いられているのかには一部共通性もみられる。このことから、スポーツをめぐる「沖縄らしさ」は、全体としてみれば「男性らしさ」「女性らしさ」のジェンダー規範とはある程度独立した包括的な意味内容を有している可能性も推察し得る。

3. 「沖縄らしさ」の多様さと曖昧さ

これまで論じてきたように、特定の競技などに着目することで「沖縄らしさ」の意味づけに関する傾向性が看取されるが、分析結果全体を俯瞰してみると、「沖縄らしさ」には競技や文脈によって多様な意味づけがみられることに加え、最も多いコードが「意味不定」であり、その意味づけに多分な曖昧さが残されていることに留意する必要がある。

トンプソン（2008）は、日本のスポーツメディアにおける「日本人種」言説を「漂流するシニフィアン（floating signifier）」、すなわち、意味が固定されず文脈によって変化する記号と捉え、それらが「日本人種」というカテゴリーの自明性やイメージ構築に影響を与えていることを指摘した。この議論に依拠すれば、スポーツをめぐる「沖縄らしさ」についても、意味が固定されない流動的な記号という側面があり、そのことが結果的に「沖縄らしさ」なるものが確かに存在し得るものの自明性を担保することに繋がっている可能性も推察できる。つまり、スポーツをめぐる「沖縄らしさ」は、「どのような意味であったとしても、何かが『沖縄らしさである』と語られることそれ自体が重要」なのではないだろうか。現代の沖縄県民にとって、「『沖縄らしさ』とは何か」という点に流動性を含みつつ「我々には『沖縄らしさ』というものが確かにある」という形で提示される言説は、揺らいでいる沖縄アイデンティティの構築に重要な影響を与え得るものであろう。

V まとめと課題

本研究では、沖縄県内のスポーツ報道において、「沖縄らしさ」という文言が何に対して、どのような意味で用いられているのかについて検討することを目的とした。2000年以降の「琉球新報」「沖縄タイムス」の記事を対象に分析を行い、主に以下のような結果が得られた。

- (1) 「沖縄らしさ言説」が用いられた競技はバスケットボールが最も多く、特に「小柄であるが故にスピードを活かす戦い方」や「特異的な個性」などの意味づけが多くみられる。
- (2) 「沖縄らしさ言説」は子どもから大人まで幅広い年代や競技レベルを対象に用いられる傾向にある。
- (3) 「沖縄らしさ言説」が頻出するバスケットボール、ハンドボールは男性の競技者・団体を扱う記事が多く、空手は女性の競技者・団体を扱う記事が多いなど、競技ごとに「沖縄らしさ言説」が表れる性別にやや差異がみられる。ただし、全体としてみると、男性を扱う記事と女性を扱う記事で同様のコードが上位に位置している傾向がみられるなどの共通性も看取される。
- (4) 「沖縄らしさ言説」の意味づけは競技や文脈により多様であり、意味が明確化されていない（読み取ることができない）ものも多い。

以上の結果から、バスケットボールなどの特定の競技における「沖縄らしさ」の意味づけが、日本における沖縄という地域の立ち位置やキャラクターを象徴し差異化を図る言説になり得ている可能性や、「沖縄らしさ」の意

味が固定されず流動的であることが、結果として「沖縄らしさ」なるものの自明性を担保している可能性が推察される。

本研究ではこれらの議論から、スポーツをめぐる「沖縄らしさ」の言説が、現代の沖縄県民における揺らぐアイデンティティの構築に重要な影響を与えている可能性があることを指摘しているが、具体的にどのようなプロセスで言説が県民のアイデンティティ構築に関与しているのかという点は明らかにされていない。この点を読み解くためには、メディア分析のみならず、その受け手や競技者の実践にも目を向ける必要がある。加えて、各競技における意味づけの差異がなぜ生じているのか、それらの意味がなぜ「沖縄らしさ」であるとされているのかという点は、コーディング分析のみでは十分把握しきれない課題として残されている。例えば、バスケットボールやハンドボールに類出した「速さ・走力」「個性・個人技」の意味づけが同じゴール型競技のサッカーであまりみられないのはなぜか、空手ではなぜ女性競技者の身体・動きが「沖縄らしさ」とされる傾向にあるのか等、競技ごとの差異や意味生成の背景を分析していくことは、今後の重要な課題である。

また、本研究では現代のスポーツ報道にみられる「沖縄らしさ」の自己言及的な意味づけを読み解くにあたり、2000年以降の県内二紙に分析対象を限定している。そのため、この二紙の報道姿勢は、本分析の結果に重要な影響を与えているものと推察される。例えば、「沖縄タイムス」は、戦後「県民が自己のアイデンティティを求め葛藤」する時代において「住民とともに『抗う新聞』」（諸見里，2021，p.8）としての立場を形成してきたという。こうした姿勢は、県内紙が「沖縄らしさ」に自己言及を行う背景として念頭に置く必要があろう。言説のより多面的な様相やその歴史的な変化を詳細に読み解くためには、2000年以前の記事や県外紙および他のメディア等を含めた言説空間全体に分析対象を広げる必要がある。これらの点を踏まえ、沖縄のスポーツ文化をめぐる「沖縄らしさ」の言説と沖縄県民のアイデンティティ構築の諸相をより精緻に読み解いていくことは、今後の課題としたい。

付記

本研究は「2024年度沖縄大学特別研究助成費」の交付を受け実施したものである。

注

- 1) 「沖縄」の他に「琉球」も当該地域を表す文言であり、歴史や伝統を意識して使用される傾向にあるとい

う点で「沖縄らしさ」を包含する表現であるとも捉え得るが、本分析ではあくまで直接的に「沖縄らしさ」という言説にどのような意味づけがなされているのかを検討するため、「沖縄らしさ」「沖縄らしい」という文言のみをキーワードとして記事を抽出した。

- 2) 内容分析の信頼性担保のための複数分析者間での検証は、全サンプルの10%以上で実施することが望ましいとされる (Lombard et al., 2002)。
- 3) 第二コーダーが記事を分類する際、筆者が生成した既存のコードに当てはまらない意味がみられた場合には新たなコード生成を提案してもよいものとしたが、特に提案はなく、すべて既存のコードに分類がなされた。
- 4) コーディングはあくまで「記事上から解釈できる意味づけ」による分類であり、それらの意味づけが客観的事実に基づくか否か（例えば、沖縄のスポーツ選手が本当に「速い」データがあるのか、等）を問うものではない。この立場は、客観的事実の有無を問わず何らかの意味で「らしさ」が語られることそれ自体が集団のアイデンティティ構築に関与し得るとする先行研究の視座（有元，2003；笹生，2020，2021）に連なるものである。

文 献

- 安達智史（2020）再帰的近代のアイデンティティ論：ポスト9・11時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム。晃洋書房。
- 有元健（2003）サッカーと集合的アイデンティティの構築について：カルチュラル・スタディーズの視点から。スポーツ社会学研究，11：33-45。
- Branscombe, N. R. and Wann, D. L. (1991) The positive social and self concept consequences of sports team identification. *Journal of Sport and Social Issues*, 15 (2): 115-127.
- Cronin, M. (1999) *Sport and Nationalism in Ireland: Gaelic Games, Soccer and Irish Identity Since 1884*. Four Courts Press.
- ギデンズ：秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳（2005）モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会。ハーベスト社。
- 張本文昭・麻生伸一（2024）沖縄県におけるバスケットボールの伝来と普及および戦後復活の実相。沖縄県立芸術大学紀要，32：53-73。
- Hargreaves, J. (1992) Olympism and nationalism: Some preliminary consideration. *International Review for the Sociology of Sport*, 27 (2): 119-135.

- ヘザー・サイクス・関めぐみ・井谷聡子 (2018) ホモナシヨナリズムとスポーツ・メガイイベント：バンクーバー2010から東京2020オリンピックまで。スポーツとジェンダー研究, 16 : 89-111.
- Horton, P. A. (2000) The 'green' and the 'gold': The Irish-Australians and their role in the emergence of the Australian sports culture. *The International Journal of the History of Sport*, 17 (2-3): 65-92.
- 深谷智美 (2010) 熱意や熱戦の行方：甲子園大会という舞台の「沖縄の高校野球」認識。琉球アジア社会文化研究会紀要, 13 : 75-107.
- 加藤晴明 (2015) 自己メディア論から地域の自己メディア論へ：〈地域と文化〉のメディア社会学：その1。中京大学現代社会学部紀要, 9 (1) : 1-32.
- 加藤大仁 (2001) スポーツとナショナル・アイデンティティ：沖縄海邦国体「焼き捨てられた日の丸」事件を手がかりに。慶應義塾大学体育研究所紀要, 40 (1) : 31-38.
- 熊本博之・安藤由美・山根清宏・田辺俊介・松谷満・米田幸弘・高橋順子 (2023) 「政治参加と沖縄に関する世論調査」調査報告書（速報版）：対象者の皆様へ。<https://prj-ipa.waseda.jp/wp-content/uploads/2023/06/ReportOkinawa2022compressed2.pdf>, (参照日2024年9月23日)。
- Landis, J. R. and Koch, G. G. (1977) The measurement of observer agreement for categorical data. *Biometrics*, 33 (1):159-174.
- Lombard, M., Snyder-Duch, J., and Bracken, C. C. (2002) Content analysis in mass communication: Assessment and reporting of intercoder reliability. *Human Communication Research*, 28 (4): 587-604.
- 林泉忠 (2009) 沖縄住民のアイデンティティ調査 (2005年～2007年)。政策科学・国際関係論集, 11 : 105-147.
- 松本恭幸 (2020) 地方紙の抱える課題とその対応。ソシオロジスト (武蔵大学社会学部), 22 : 173-187.
- 諸見里道浩 (2021) 新聞が見つめた沖縄。沖縄タイムス社。
- 中村敏雄 (1978) スポーツナショナリズム。大修館書店。
- 奈良部光則 (2024) 沖縄の「誇り」としてのバスケット。<https://www.ssf.or.jp/knowledge/spi/37.html>, (参照日2024年11月30日)。
- 岡本純也 (1997) 民俗舞踊と地域アイデンティティ：沖縄の民俗舞踊エイサーの事例。研究年報 (一橋大学スポーツ科学研究室), 1997 : 59-62.
- 岡本純也 (1998) 国際化とローカリティー：「民俗舞踊と地域アイデンティティⅡ」。研究年報 (一橋大学スポーツ科学研究室), 1998 : 61-67.
- 岡本純也 (2012) バスケットボールの記号論：沖縄。体育の科学, 62 (5) : 345-348.
- 岡本純也 (2013) 地域アイデンティティの基盤としての民俗舞踊の身体感覚。一橋大学スポーツ研究, 32 : 60-63.
- Riffe, D., Lacy, S., Watson, B., and Fico, F. (2019) *Analyzing media messages: Using quantitative content analysis in research* (4th ed.). Routledge.
- 笹生心太 (2020) 日本代表には「組織力」があるのか：サッカー報道に見られるナショナリズム。体育学研究, 65 : 659-676.
- 笹生心太 (2021) 日本人選手は「身体能力」に劣るのか：サッカー専門誌に見られるナショナリズム。年報体育社会学, 2 : 77-88.
- 多田治 (2004) 沖縄イメージの誕生：青い海のカルチュラル・スタディーズ。東洋経済新報社。
- 多田治 (2008) 沖縄イメージを旅する：柳田國男から移住ブームまで。中央公論新社。
- 高橋豪仁 (2005) スポーツ観戦を介した同郷人的結合。スポーツ社会学研究, 13 : 69-83.
- トンプソン・リー (2008) 日本のスポーツメディアに見られる人種言説。スポーツ社会学研究, 16 : 21-36.
- 玉山あかね (1999) 南風原町の綱引きに見るバイオレンスの変容。スポーツ人類学研究, 1999 (1) : 37-58.
- 豊見山和美 (2007) オリンピック東京大会沖縄聖火リレー：1960年代前半の沖縄における復帰志向をめぐって。沖縄県公文書館研究紀要, 9 : 27-36.
- 土佐昌樹 (2015) 東アジアのスポーツ・ナショナリズム：国家戦略と国際協調のはざま。ミネルヴァ書房。
- Vincent, J., Kian, E. M., Pedersen, P. M., Kuntz, A. M., and Hill, J. (2010) England expects: English newspapers' narratives about the English football team in the 2006 World Cup. *International Review for the Sociology of Sport*, 45 (2): 199-223.

(令和7年2月4日受付)
(令和7年6月15日受理)